

ホラー映画における予測された恐怖と快

八坂 隆広 (神戸大学)

本発表では、ホラー映画が観客にいかにか快を与えているかについて、構成主義的情動理論における予測メカニズムを用いて検討する。

ホラーフィクションは恐怖という日常生活では忌避される情動を観客のうちに引き起こす。ではなぜ多くの人々がホラーを鑑賞するのか。この問いを、「ホラーのパラドックス」として1990年に提起したノエル・キャロルは、ホラーフィクションに共通する物語の構造が、鑑賞者に快を与えるようにできていることを指摘し、この快が恐怖の不快さを補償すると主張した。しかしホラーフィクションが十分に怖くない場合に非難されうるように、ホラーフィクションの鑑賞者にとって恐怖は対価ではなく目的であると批判がなされてきた (Feagin, 1992; Gaut, 1993; Smuts, 2007)。そのためか現在に至るまで、ホラーフィクションが与える恐怖がどのような理由でホラーフィクション鑑賞の動機になるのかを明らかにすることが、パラドックスの解消の方法として重視されてきている (Smuts, 2014; 戸田山, 2016; Kiss et al, 2024)。

「快」に訴えるこれまでのパラドックスの解決策は、物語の快と恐怖の快のどちらか一方のみが鑑賞を動機づける主要な要因であることを前提としてきた。しかしホラー映画鑑賞に伴う独特の快は、物語によって観客にある程度の情報が与えられた上で恐怖を喚起する場面が提示されることによってもたらされる。物語と恐怖は相互に依存しており、どちらかの快だけを分割して論じることはできない。このことから、本発表では、この相互依存関係を前提としてホラーのパラドックスを解決することを目指す。そのための手段として、構成主義的情動理論における予測メカニズムを導入する。

この理論では「脳はこれまでの経験や知識を用いてこれから知覚される刺激を常に予測しており、その予測に基づいて刺激を解釈することで情動が生じる」とされる。この理論に基づけば、ホラー映画の観客の脳は、これまでの鑑賞経験や鑑賞中の映画の展開を用いて次の場面を常に予測している。そしてその予測に基づいて実際に提示された場面（例えば怪物の出現）を解釈することで恐怖が生じるのである。これに基づき、物語の鑑賞経験を「予測の連続」として組み込むことで、恐怖という情動と物語は相互に依存した形で議論されうる。

本発表はこの予測メカニズムを用い、ホラー映画の鑑賞経験において、物語や映画史的経験から予測が導かれうることを主張し、それらがいかにか鑑賞者の快または鑑賞の動機に結びついているのかを検討する。